

第2回日中協定校間交流学術シンポジウム「大学におけるグローバル人材育成」

司会者：（第1部）寺田盛紀（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授、国際交流委員会委員長）
（第2部）河野明日香（名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授）

【研究発表レポート】

名古屋大学教育学部・大学院教育発達科学研究科と中国・華東師範大学教育科学院との共催により、2014年4月15日の9時30分から14時30分にかけて、「第2回日中協定校間交流学術シンポジウム」が、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育学部本館1階の大会議室にて開催された。今回は6名の訪問団を迎え、「大学におけるグローバル人材育成」というテーマのもと、活発な議論が展開された。

はじめに、松田武雄教育発達科学研究科長・教育学部長から開会の挨拶、開催の主旨の説明がなされた。続いて範国睿教育科学院院長による挨拶では、華東師範大学は、中国教育部に国家の重要大学として「985工程校」に指定され、中国において重要な役割を担う大学のひとつであるという紹介と、今回のシンポジウム開催への祝辞が述べられた。

今回のシンポジウムは、2部構成であり、第1部で3名、第2部で2名の計5名による発表がおこなわれ、すべての発表は2名の同時通訳者を介しておこなわれる形式となった。シンポジウムの参加者は、約60名であった。

第1部では、範国睿院長が「ビッグデータ時代と教育改革」と題し、多くの人々がインターネットを通じて大規模で様々なデータのやり取りをあらゆるデバイスでおこなうことのできる時代（クラウドコンピューティングへの注目、ビッグデータ時代）が、教育にどのような影響を及ぼしているかについて考察をおこなった。ここでは、MOOCをはじめとする教育サービスの登場により、教育は場所を選ばず、多様な機会が人々に提供されるようになり、現在の中国では、企業や政府との連携のもとおこなわれている状況が示された。

続く杜成憲教授の、「教師の養成は師範学校にあるべきか、それとも大学にあるべきか？—中国の高等教育の教師養成体制の発展過程における『振り子』現象」と題された発表では、中国の教員養成体制の独自の発展過程とその要因、今後の展望が示された。杜氏は、中国の教員養成機関は、一元化と多元化が繰り返される「振り子」の過程をたどってきたとした。その理由は、中国の国家政策が欧米に偏重してきた歴史や、教員の質と量のバランスを保つ議論のうちに集約された。現在では教員養成機関が多元化したことで、教員の量的問題が解決された。今後は、中国東西での教育格差の是正や、質の向上が求められているとした。

第1部の最後は、服部美奈教授が「ASEAN統合と高等教育連携—グローバル人材育成の観点から—」と題し、ASEANにおける高等教育連携の現状をインドネシアの事例を通じて紹介し、課題と今後の方向性について指摘した。現在のASEANにおける高等教育連携は、その規模や目的が多層的であり、いずれの連携においても、単なる頭脳流出ではなく頭脳還流となるかどうかという点で課題がある。服部氏は、高等教育機関は単に他機関と提携を結ぶことに尽力するのではなく、高等教育機関の本来の役割である研究と教育活動をおこないつつ、連携をはかっていく必要があるとした。

第2部では、金忠明教授が「中国の高校におけるグローバル人材養成の歴史、現状と将来」と題して、主に上海市の状況を事例として、高校教育の国際化の動向と、その課題を示した。現在は中国の多くの高校で、国際的なカリキュラムが導入されるなか、国際化に対応した教員の質の向上や、国際的な教育と中国民族文化の教育とのバランス、国際教育の評価システムのあり方などが、主な論点にあげられていた。

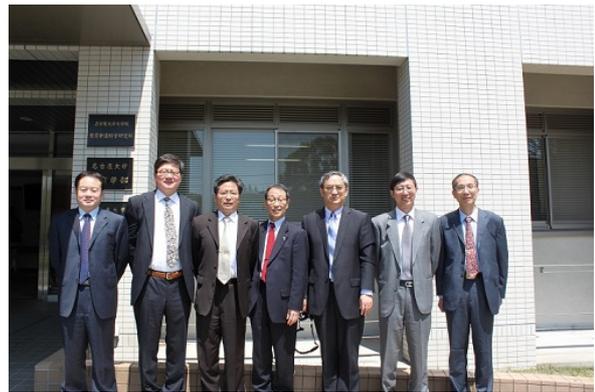
続いて、第2部の最後の発表者である西野節男教授は、「脱『グローバル人材』の育成を考える」と題し、「グローバル」な状況とは全体を一つととらえるものではなく、二国間の関係が複数積み重ねられたプルーラルなものであるとして、「グローバル人材」の育成のあり方を検討した。西野氏はグローバル人材育成の現場において、主要な使用言語が英語である状況を問い、今後は、特に中等教育の段階から、互いの言語を尊重した教育カリキュラムの研究が進められる必要性を説いた。

質疑応答では、「日本でも一部の図書館が、一般市民の貸し出し記録など個人の学習情報を管理している状況がある。それに関連して、大学が学生の学習情報を管理することについては、どのような議論があるのか」、「ビッグデータ時代の到来は、中国の東西格差として語られるような農村の教育状況に対しての解決策となりうるか」、「クラウドコンピューティングを通じた教育方法は意義深い一方で、アナログな教育の良さをどのように保つかが課題ではないか」などの質問・意見が出され、活発な議論がおこなわれた。

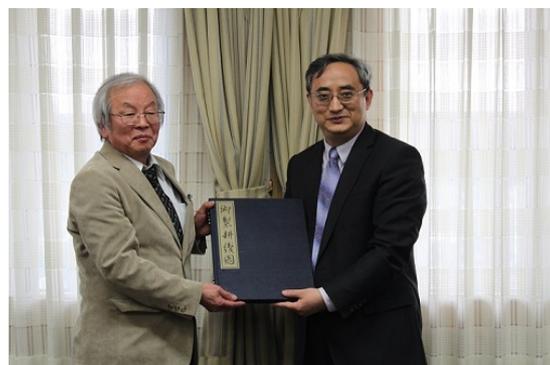
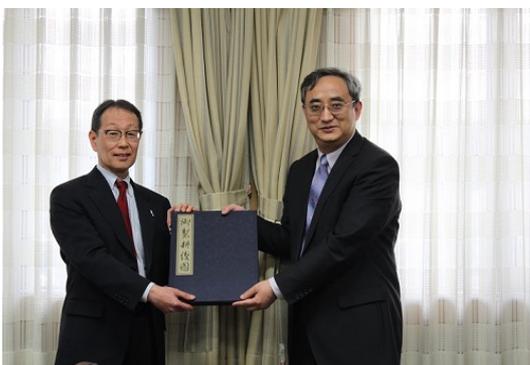
最後に、寺田盛紀教授（国際交流委員会委員長）は「グローバル人材の育成とは、卒業後に場所を選ばず働ける人材の育成と考えている。またグローバル化の実際は、西野氏の言うようなブロック化の状態にとどまっているように思う。したがって今後は、大学におけるグローバル人材の育成を、ブロックを超えて進める必要があるのではないか」という指摘を総括として、今回のシンポジウムは閉会となった。



当日のシンポジウム会場の様子



教育学部本館前にて、訪問団の方々と松田武雄研究科長の記念撮影をしました。



シンポジウムの閉会式には、華東師範大学教育科学院の代表として、範国睿院長から記念品の贈呈がありました。名古屋大学教育学部・大学院教育発達科学研究科を代表して、松田武雄研究科長と寺田盛紀教授が記念品を受け取りました。

[記：大村隆史・名古屋大学大学院教育発達科学研究科院生]